



presents

風雅うつら
サクラ大戦
個人誌

華恋亭 まいびめ

いちごいちえ
一期一会

本誌開刊半周年
向年青
スズメノ資格ノ年成未

風雅うつら同人誌
LITENK
VOL. 2

第六卷

私…、もつと昔に…。



変えられない思いと今と

私はもう変わりすぎていたの。出会った時に感じた思いを、そのまま受け止めることが出来なかった。あなたを…。でも、もう過ぎてしまったコト。忘れて、いいの。





一期一会
いちごいちえ

華恋士宅
かれんしち



帝國華撃團艶本

向年青

未成年ノ閲覧ヲ禁ズ



木々の揺れは強くなりつつあった。帝都にいつもの活気はなく、早々に閉められた店々の中では今夜の嵐に備えての団欒があるのかも知れなかった。

「少しいいかしら？」

夜の見回りを終えた大神を隊長室の前で待っていたのは、米田長官の秘書として配属された影山サキだった。

「嵐が近づいて来たみたいネ。帝劇は大丈夫なの？ 私、不安だワ。」

大神は頼られていることに満足感を覚えて答えた。

「台風は苦手なのかい、サキ君は。でも大丈夫だよ。屋根だって今日カンナが直したし、非常用品だってマリアが買って来たから怖がることはないよ。」

サキは、でも…、と言って続けた。

「帝劇って女の人ばかりでしょ。私、心細くって。大神さんは男の人だから分からないかもしれないけど、女ってこんな時、誰かそばにいて欲しいものなのヨ。」

濡れた瞳で切なげに言うサキに、大神は自分の気持ちが妙に揺れているのを感じた。

「帝劇には花組の皆や米田支配人、かえでさん達がいるから何も心配することはないよ。」

幾分うろたえ気味で言う大神の言葉は答えになっていなかった。

「大神さん…。」

サキは大神の瞳をじっと見つめて言った。あまりに思いのこもった瞳に大神は完全にうろたえてしまった。



「ああ、薔薇組の3人だって男と言えば男ですよ…。」

「お願い。少しの間、そばにいて。」

サキは大神に寄り添って言った。朝霧に濡れた葉の雫のような声が、大神の心を波立たせた。

「サキ君…。」

大神は思わずサキの肩を抱くと、部屋へ誘い入れた。

黒で統一された細身のスーツ、白い立て襟のドレスシャツ、そして真っ赤なクロスタイが黒光りする濡れた髪と対照的な白い肌、そして艶色の厚い唇を際立たせてる口紅は成熟した女の香りを漂わせている。サキは扉を閉めた大神の耳元にすつと熱い吐息を囁いた。

「私、大神さんのことがずっと気になっていたの。なのに大神さんは…。」

サキの甘い吐息が大神の体をぞくぞくと湧き立たせた。サキは待ちきれない様子で大神の背中から下半身へと手を這わせていった。そして大きくなった大神に触れるとその手をゆつくりと動かしながら、大神をベッドへ押し倒した。

「私、あなたの力になりたいのヨ。」

う…
サキ君

ズボンの中に
こんな立派なもの
隠してたのネ

おにや

大きくなって
きたわよ

早くこれで
かき回されたいワ



私…ずっと
大神さんに
興味があったのヨ

美味しそう♡



私のおクチは
気持ちいいわよ♡

本気で感じてネ

あんっ
あついわ

くちゅ

くちゅ

くちゅ



こんなにミルクを
ためてたのネ

全部飲んで
あげるワ

いやらしい液で
顔中姦されて
どきどきしちゃう



私も燃えてきたの
分かるかしら？

あ...ああ



次は私の
足のつけ根を

好きに
いじって
ちょうだい



私もう一度
大神さんのものを
食べたくなっちゃったワ

あーん

うふ♡ だんだん
固くなって
きたワ…えっちね



じよ…

上手なのネ
あん

んっ

ちゅっ
ちゅっ



私の秘部を見て
欲情してくれるの

それとも
フェラチオが
好きなのかしら



あ

お…大神さん
そう…そこ
もっと舐めて



お尻が…動いちやう

花びらの奥まで
ぬるぬるよオ



ぎゃっ

ん

サキ君
いいかい？

大神さんったら
せっかちなね…

いいワ
ちようだい♡



あなたのものを
食べさせて

くちゅ



あんな
おっきいっ

あんな
奥まで届くワ
大神さんの…すごいっ

あつ

ぬにゅっ



私の膣が
大神さんのをくわえて
ヒクヒクしてるの
分かるかしら





ああ…あつ

いいわ

ぽんぽん

あつ

くるっ…いい

ぽん

ちや

ちや



私のお尻に
入れてみない

えっ!?

ハア

ハア

ねえ

後ろの穴って
入れたことある?

こじよ

さっきまで
入れてたすぐ上の穴

最初はゆっくりと
入り口をこじ開けて
根元まで入れてネ

ここなら
中に出しても
妊娠しないの

あ

ズル
ズル

う…入った

前の穴より
よくしまつて
気持ちいいでしょ

あっそうよ

ズル
ズル

あ…もっと入れて
好きなか
動かしていいのヨ

あん

突いて…突いてっ！



サキ君：
お尻がこんなに
気持ちいいなんて

そんなに
しめられたら
もう…だめだよ

大神さんっ

いいワ
お尻でイって



あ

ああ

いくう

ひあ



サキ君
泣いて

黙って

ん

んっ

ふ

ん



大神
さんっ

おん

あ
びゅ
びゅ



「大神さんは、どうしてここにいるの？」

起こした体を布団で隠し、サキは真っ直ぐに聞いた。

大神は黙然としてしまった。どうして…、か。

サキは大神の答えをしばらく待っていたが、やがて語り出した。

「私はどうしてここに来たのか、もう分からなくなってきたワ。…私ここに来て初めて本当の自分に出会った気がするの。

ねえ、大神さん…。」

サキそこで言葉をためらっていたが、崩れるように大神の胸に体を投げ出した。そして優しく抱きとめる大神に、

「私を、守って…。」

と言った。言葉がこぼれるようだった。

「サキ君…、大丈夫。守ってあげるよ。」

大神は優しく言った。サキの体から力が抜けた。



「サキ君も花組の皆も俺の大切な人だから。」

サキの体が一瞬止まった様に感じたのは気のせいだったのだろうか。サキは大神の胸からそつと体を起こすと、

「大神さん、ありがと。」

とつぶやくように言った。

大神の部屋を出たサキは階段で、下にいたかえでと目があつた。サキは慌てることなく、そのままゆつくりと降りて行くと、

「口紅でもとれているのかしら？」

と艶っぽい笑みを浮かべて聞いた。大神に限らず男ならとろけてしまいそうな笑みだったが、かえでに効く筈がない。いえ…、と機械的に答えるかえでの目には、サキを探るような力がこもっている。サキはその視線にまるで気付かないように、すつと脇を通り抜けた。

「あらよかつたワ。口紅は女の命ですものネ、かえでさんもたまには色の強い口紅でもなさつたら。大神さんだつてお姉さんじゃなく、あなたを見るようになるワ、きつと。」

サキは、私のでよければ、いつでもお貸ししますワと当てつけるようなセリフを付け加え消えていった。

かえでは言葉もなく、そこに立ち尽くしていた。



「…ボクは…。」

強い風の下にレニは立っていた。他に人影はなく赤黒い雲に覆われた空の下、粘りつくような空気が帝都を這いずっていた。レニの背後にアイゼンクライトの巨大な影が威圧するように伸びている。と、その影からもう一つの影が浮き上がった。その影は一人呆然と立っているレニの横に来ると、その耳元に囁いた。

「レニ…いらっしやい…。」

艶っぽい笑みを浮かべたその影は、レニをアイゼンクライトと共に帝劇から引き離していった。

「レニ…。」

アイリスの部屋にはまだ微かに花飾りの香りが残っていた。小さな手で精一杯作った花飾りはレニの力になれたのだろうか。きつと大丈夫という思いとは裏腹にあふれるような不安がアイリ

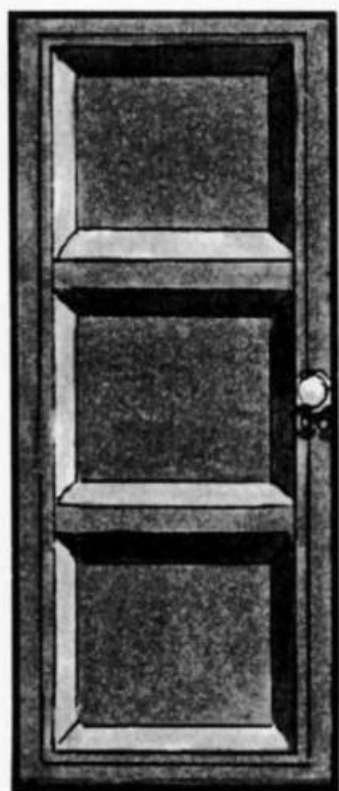


スを襲った。微かに残っていた花飾りの香りが、かき消えていったようだった。

「レニ…。」

小さな唇が、もう一度つぶやいた。





さくらは近頃大胆になってきた。以前なら大神と部屋で二人きりになっても、自分から求めることはなかった。しかし雷が鳴り心配になった大神が部屋に入ってきた時、さくらは帰ろうとする大神を引き止め、恥ずかしがりながらも積極的に求めていった。最近入ってきた大人の魅力を振りまく影山サキに対抗心を持っているのか、それとも大神に別の女の匂いでも感じたのか…。

「大神さん…、誰かとしたんでしょ。」

さくらは反応のない大神自身をあやしんで言った。大神はあわてて否定した。たった今サキとしていたなんて言える訳がない。まして今そのサキのことを考えていたとは。さくらは触るだけでは物足りなくなってきたのか、大胆にも大神自身をズボンから出し直接唇を重ねてきた。これで勃たなければあやしまれる！と言う焦りが通じたのか、さくらの柔らかい唇に感じたのか大神自身はやっとさくらに応えはじめた。





あ

ちゃ

ちゃ

大きくなって
きましたね♡



あれえ？

ん…もう

大神さん！



あむっ

ザアアアザアアア

さつきサキ君と
2回もしたばかりだから
とは言えないよなあ…

あ…先っぽから
ぬるっとしたの
出てきました

ちゅぽ
ちゅぽ
ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

こっ
いで
いいんですか？

ちゅ
ぽ
ん
んっ

それでもさくらくんの
お口と舌で触られれば
起ってしまうのは
我ながら無節操だなあ

大神さん
…私にもして下さい

あ…感じる
ここに…欲しいな

ちゅ

ちゅ



ありがとう
じゃあ次は
僕がせめるよ

あん

おっ

くっくっ

あっ

先っぽ…
感じる

サキ君の豊満な
乳房にくらべると
さくらくんのは小ぶりだけど
柔らかくて感度がいいな

もっと

大神さん
くすぐりたい…あ
優しくしすぎは
困りますっ



ピクッ

広げてみて
いいかい

もう
ぐっしよりだ

足をゆっくり広げると
花びらも少しずつ
開いてくる

外側は子供のよう
未発達だけど
密が中からあふれてきてる

あ

えっちな私は
嫌いですか？

かわいいよ

私…いんらんじゃ
ないですよ

こんなに感じるのは
大神さんのせいですっ

くちゅ
くちゅ



えっ…

でも

さくらくんの
花びらを
広げて見せて

は…はい

入れるよ

さくらくんの体に
僕は何度か入ったが
普段 気の強い
さくらくんの
この時の恥じらう姿が
とても可愛らしい

ひゃっ

入っ…たあ

ぱくっ

ぎゅっ
ぱくっ

さくらくん
中はしっかり
濡れてるね

や…やだ
いやらしいこと
言わないで…下さい

奥まで…入れちゃだめ
頭が真っ白に
なっちゃう…

あ

初めこそ
先の方だけで
痛がってはいたが
今ではぎゅっと
僕のものを受け入れてくれる

でも こんなに大きなものが
さくらくんの体の中に
入るなんて
今でも不思議だ

お…大神さん
もう少し
…欲しいっ

あ

あんっ

ぱん

ぱん ぱん



あ

だめ

だめ
やめないで
もう…すぐっ

あ

そこっ
すっ…っ…っ…



びしょっ

びしょっ
びしょっ
びしょっ

彼女は
僕のものしか
知らない

あ

だめえっ

大神さんの
かたい…かたいのっ
それ…すごくいいっ

あ…いくっ

いっくうっ

ハッハッハッ

大神さん…

「さくら君のおかげで今日はぐっすり眠れそうだよ。」

大神は妙なおせじを言った。さくらは可愛げに顔を赤くしてうつむいた。恥ずかしそうなその姿は、自分から求めていった羞恥のあらわれなのだろうか。上目遣いに大神を見るまなざしに、ほころびはじめたハウセンカのような色があった。

「じゃあ、おやすみ。」

「はい…。おやすみなさい。」

消え入りそうなさくらの声を聞いて、大神は部屋を出た。外から強い風の音が聞こえていた。大神が部屋に戻りかけると、後ろで扉の開く音がした。大神が振り返るとレニの部屋の前へ、ア



イリスが寝間着に着替えもせず心配そうに駆け寄っていた。

「アイリス。」

大神は驚かさないように優しく声をかけた。

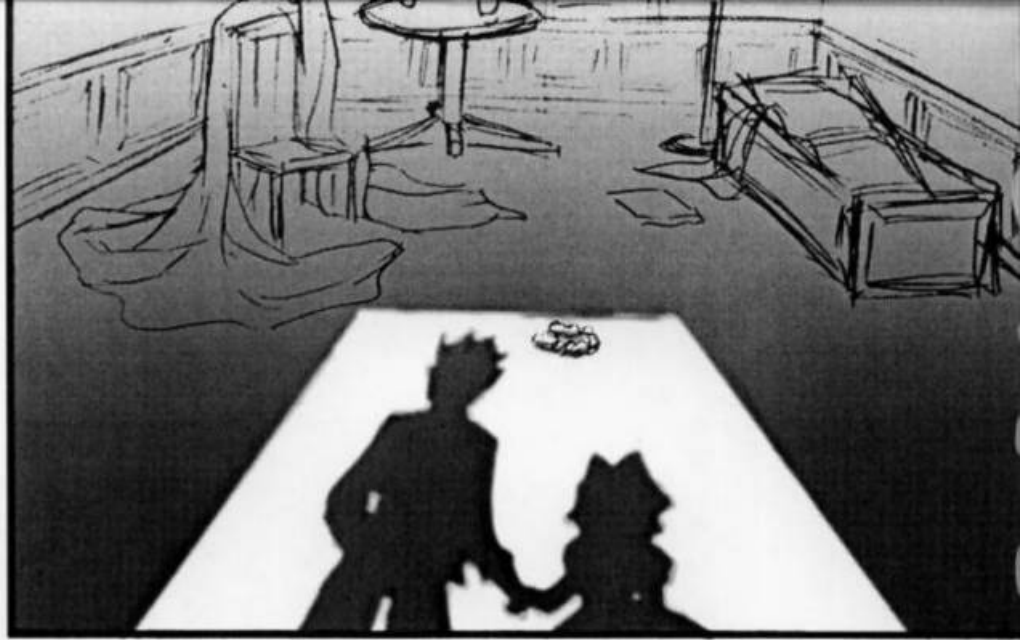
「あ、お兄ちゃん。アイリス…。…なんだか不安でむねがドキドキするの。」

アイリスの全身が不安を表現していた。

いつもの明るさもない。大神はアイリスを元気付けようと、レニの扉を叩いた。

…。

中から返事はなかった。もう寝ているのだろうか。続けて扉を叩いてみたが、やはり返事はなかった。さすがに大神も不安に



行こう！

手遅れになるまえに。

なり、もう一度強く叩くと一声かけて扉を開けた。

殺風景な部屋のなかに、レニの姿はなかった。

アイリスは床に崩れかけた花飾りを見つけ、悲しげに拾った。

「レニ…、捨てちゃったのかなあ？」

「探しに行こう、アイリス。」

大神は強く言った。

帝都は暴風域に入り、闇の中で狂い荒れていた。二体の光武・改の懸命な機械音が心細く響いていた。



動きだした黒い風



「あら、お目覚め？」

レニが目を開けると影山サキ、否、黒鬼会・五行衆の水狐が妖艶な笑みを浮かべ、愉しそうにレニを眺めていた。

「ここは……？」

椅子に座らされていたレニが、辺りを見渡した。

「……！ ヴァックストウムの……!!」

思い出したくもない部屋である。レニの体が一瞬にして凍りついた。服までその時のものに変えられている。しかも身動きできないように椅子に縛りつけられている。水狐はレニの様子を充分に愉しみながら、



「レニ、あなたは女なのよ。女ってどんなものか今、それを教えてあげるワ。」

女としてはあまりにも魅力的な唇を寄せ囁いた。

「そう、ムダなの。あなたはもう私の思うままなのヨ。」

水狐の生暖かい吐息が耳元を通り全身を駆けめぐった。その手がレニの髪を意味ありげに撫でる。

「や、やめろ！」

レニの叫び声をまったく聞いていないかのように、水狐の手は髪からうなじを過ぎて行く。その暖かくゆるやかな感触はレニの胸元へと移っていった。

「レニ、あなたは女なのよ。女ってどんなものか今、それを教えてあげるワ。」



信じあえる友など
偽りなのヨ
信じれるのは自分のみ

あなたなら
よく分かってるわよネ
レニ

や…やめろ
離せっ！

あなたは女なの
それを利用しない
手はないのヨ

ふふ
うぶ毛が逆立って…
やわらかい
はりのある肌ね

うっ

ちゅっ



レニ…
私に似てるワ

くっ

さあ 力を抜いて
気持ちいいことに
身をゆだねるの



あ

うっ



ボクも
キミを信じない

さっきキミは
自分しか信用
しないと
言った



なにイ

なっ



強情な子ね！
なら

もうお前の

心には聞かずに
体に直接
教えるだけヨ

噛まれないように
キスは下の口に
するワ

あ

私の舌技にかかって
落ちなかった女は
いないのヨ

とろけるまで
感じさせてあげる

ふふ
表面は無表情で
無口だろうと

こっちの口は女の汁を
だらだらたらし
て意外におしゃべりね

女の体のこのくぼみは
男のペニスを受けて
快楽を得るために
あるのヨ

がまんしても
無駄ヨ
おとなしく私に
心も躰もあけわたすの

ん…

あんっ

男言葉を使っても
今のお前は
女…いえメスね

やめろっ
いやだっ…うっ



今から
おいしいモノを
食べさせてあげる

これからお前の
中に入れて
かきまわすわヨ

さあ
食べなさい!

ず
ッ
ッ
ッ

うっ…

く

ん

あッ

男ってこうして
女をむりやり
こじあけ中に押し入って
汚し…姦すのヨ

ん



あら
初めてじゃないの？
すんなり入ったワ

花組の隊長は
手が早いワ
欲望のはけ口に
なったのネ



あ
ち…ちがう
隊長は
そんな人じゃない



—そうね 私も
そんな人じゃないって
知ってるワ

さあ イきましよ
私と一緒に



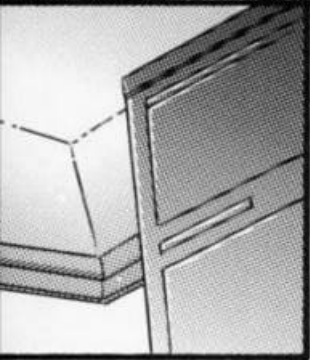
いやだあ

あっ

うあ

いい子ねレニ
小さい体の割に
ちゃんとかわえてるワ

いい声で
鳴いてるじゃない
ふふふ



お前は女に姦されて
にせものの張形で
達するのヨ!

いやあ

あっあ

あー

ハア

ハア

ハア

ハア

雪花波紋十軌。水狐操る宝形から衝撃が飛び、花組の損傷も激しくなってきた。

帝劇との通信が通じず、アイリスを帝劇に戻し、さくら達を呼んできてもらったが、回復の出来るそのアイリスはレニを捜しに行っていない。対する宝形は倒すたびに分身し大神達に勝つ術はないように思えた。

しかしカンナはひるまなかった。

「まだやられたわけじゃないぜ。三進転掌！」

一体の宝形が消え、また一体が現れる。わずかにはあるが宝形の動きが鈍くなった。

「カンナさんだけに、いい格好はさせませんことよ。」

すみれが必殺技を放った。三体が消え再び三体



が現れた。が、手応えはあった。

「フフ…、やるわね。じゃあこういうのはどうかしら？」

水狐がそう言うと八体の宝形から闇紫色の煙が出てきた。

「こんな煙如きで光武・改は何ともなれへんで。ウチが特別に開発した換気清浄機構が何でも除い…な、なんや…体が…。マリアはん、これは…。」

「紅蘭…あつ、だめつ、…うずきが抑えられない…隊長…。」

「ンフフ。反応が早いわね。そうこれは人間の女に特に反応させるモノ。どう、欲しくなってきたんでしょ。」

花組の動きが急に鈍くなったところを、宝形は追い打ちをかけた。花組の機体の損傷が一気に激しくなった。もちろん大神とてた



だ黙っていたわけではない。しかしこうなってしまうては戦力が圧倒的に違う。しかも相手は倒すたびに次々と分身するのだ。ここまで来て……。大神は絶望的な怒りの声をあげた。

「水狐ーっ!!!」

「あやめ…姉さん?」

帝劇地下の作戦司令室。藤枝かえでは不思議な光景をみていた、いや感じていたのかも知れない。

大神くんを 助けてあげて

それはかえでのまえに浮かぶ水晶玉ほどの小さな暖かい光で、そ





こちらを感じる言葉だった。そしてその言葉は紛れもない姉、あやめの声だった。

大神くんはもうすぐ水狐の正体を知ってしまうわ でも彼では水狐を斬ことが出来ない その優しさが哀しみに変わることもあるの アイリスはレニを助けて今 大神くんの所へ向かっている もうすぐ通信も通じるようになるわ お願いね 大神くんを助けてあげてね

光はかえでにそう告げると、すっと消えてしまった。

「姉さん…。」

雨は止みかけているようだ。

「大神一郎、ここまでね。」

宝形は巨大な扇を、損傷激しい大神の倒れた光武・改に突きつけていた。

「心配いらないワ。残りの花組は色欲にまみれたまま殺してあげるから、あの世で好きなだけやりあうといいワ。…バカな男。」

瞬間大神に何かが走った。

「！ サキ君なのか？ サキ君なんだな！ どうして君が黒鬼会の一人なんだ!？」

大神は水狐に向かって呼びかけた。

「サキ君、君は本当は優しい人だ。戦いの中で人を殺せるような人なんかじゃない。」



「そんな甘いこと言ってて、よく花組の隊長が務まるわね。私のことを知らないくせに…、私の方を見ようともしなかったのに…。」

水狐―影山サキは自分に言い聞かせるようにつぶいた。こうしてしまった以上、彼女自身後戻りが出来なかった。サキは大きく振りかぶった扇を一気に振り下ろした。

「とうとう、助けられなかったみたいね。花組も…私も…。」
「え…。」

と、その時大神の機体に通信が飛び込んできた。

「隊長！ 宝形の本体はそれじゃない。隊長の後ろにいる奴だ！」



「レニ！ 戻ってきたですかー！」

ソレツタが喜びの声をあげた。アイリスの機体に支えられ、ひどく疲れてはいるようだがレニの無事な姿がモニター越しに見えた。

一瞬の隙だったのか、それともサキのためらいだったのか……。大神の機体は間一髪のところまで反転し、宝形の一撃を避けた。そしてその扇はそのまま大神の後ろにいた本体を切り裂いていた。

「サキ君っ!!」

大神は思わず声をあげた。殺されそうになりながらも、それでも声をあげずには、助けずにはいられなかった。

「サキ君、大丈夫かい。しっかりするんだ。」

「何故、私を助けようとするの？」

このまま風が消してくれたら……。

「……」

サキの苦しい問いに大神は今度も答えられなかった。

「……フフ、そうね。私だって私自身のことから分らないものネ。」

もしかしたら最後の一撃は、大神が逃げなくてもサキ自身に当たっていたのかも知れない。

「私……、もつと早くに……」

サキの機体が光に包まれた。

「隊長危険です！」

マリアが大神機を宝形から引き離れた。

サキの機体が光に消えていった。

あなたと逃げて
いきたかった。



「僕は…、サキ君を助けてあげられなかった。」

かえでの部屋で包帯姿の大神は後悔の気持ちをこぼしていた。
パンツ！

大神の頬に痛みが走った。

「しつかりなさい。人助けもいいけど死んでしまったら意味がないのよ。死んでしまった人は、二度と帰ってこないのよ…。」
かえでの声が潤んでいた。

「私、何も出来なかった。あなたが死んでしまう事を考えたら、体が凍えて動かなくて…。私、姉の事が…。姉ほど…。お願い、私だって…。」

かえでは初めて大神に激しく体を寄せた。かえでの髪から濡れた香りが漂った。



昔から
比較されてきたわ
あやめ姉さんは何でも
できる人だったから

あ

何で…
神とか悪魔に
翻弄されて
一生を終えねば
ならなかったのよ…



姉さんは
美人で…

かえでさんも
きれいですよ

おせじは
いいのよ

姉とはやったの？
どうだった

…



ごめんなさい
変な事を聞いて

さっきからかたいのが
当たっているけど

怪我人なんだから
…やめましょう

ケガなんて
いいんです

かえでさんを
抱きたいんです
今は

そう…

分かったわ

ひちゃ
ひちゃ

奥まで舌を
入れちゃだつ
いけない…わ

ハッ
ハッ
ハッ

あつ

あつ
あつ
あつ

だめ…よ

あ…だめえ
唇で強く
吸わないで

くう

あつ



あ...

ハア

ハア

ちようだい

...ジュジュ

ぬちゃ
とろ



涙…

違うわ

まだ
隠すんですか？

この姿で
隠せるものなど
ないでしょう

えっちな

…早く



あん

あっ

ずわわわ

ゆさ

ゆさ

ゆさ

あ

肌の触れあう部分の
暖かいぬくもりも

お腹の中の
しびれるような
うずきだって

あ

にゅる

にゅる

あ

あん

これが
生きている証なの
——そうでしょ



姉さん

あはは

あはは



私をイかせなくても
いいのよ…
我慢しないで
先にイって！

ああっ…
ふくらんできたわ

あっ

突いて…突いてっ
激しくて
何もかも忘れさせてっ



ハア

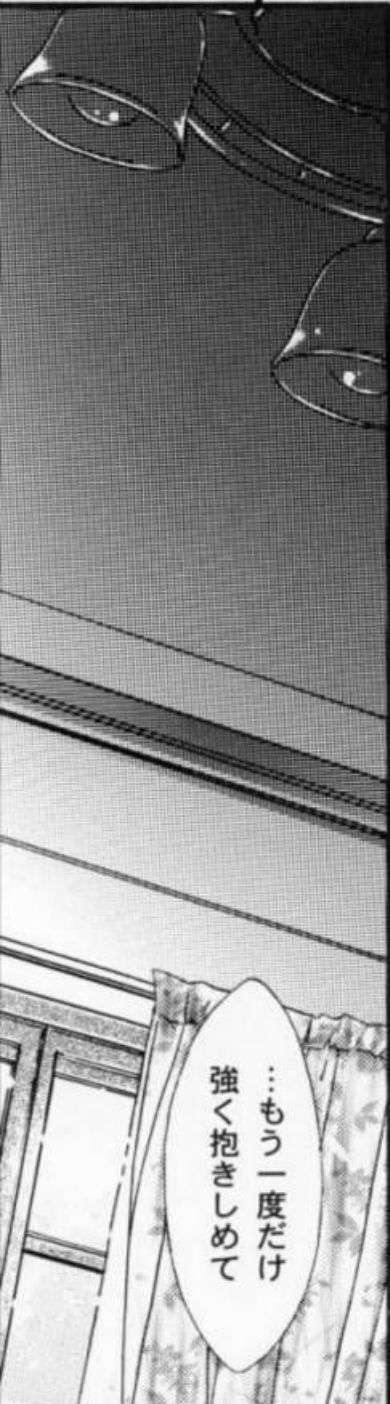
ハア



ビュッ
ビュッ

いくつ

あああ



…もう一度だけ
強く抱きしめて

かえでは服を着ていた。つい今まで求め合っていたことなど少しも感じさせない素振りだった。

「大神くん。今日のことは忘れましょ、私もそうするわ。でも…、ありがとう。」

「いやです。」

大神ははつきりと言った。かえでは当惑の表情を浮かべたが、大神は構わずに続けた。

「かえでさん、俺あなたを守ってみせます。かえでさんが見せてくれた弱い心、背負ってる重荷をこれからも隠して持ち続けるなんてつらすぎます。だから、それを俺にも持たせて下さい。」

「簡単に言うのね。でも嬉しいわ。」

かえでは少しおどけて言ったが、大神の真剣な





眼差しは言葉以上に心に響くものだった。頼りにするから、そう言ってかえでは大神に口づけた。

「今度、お墓参りに付き合ってくれる？あやめ姉さんのところと一緒に行って欲しいの。」

かえでは遠い目をして窓から空を見つめた。

姉さん…私の方が助けられちゃったわ



いつもと同じ一日 …でもいつもと違う一日。

ハア…



あの日 あんな事があつた。

隊長何ほーっと
突っ立ってんだよ

メシでも食って
元気出せよ



すみれー
おかわりくれよー

なぜ私が
おさんどんなど…





カンナはんと
大神はんの
大食い競争やね
みんなどっちかける？

大食いなら
負けないぜ

だーれーが
よそうのかしら



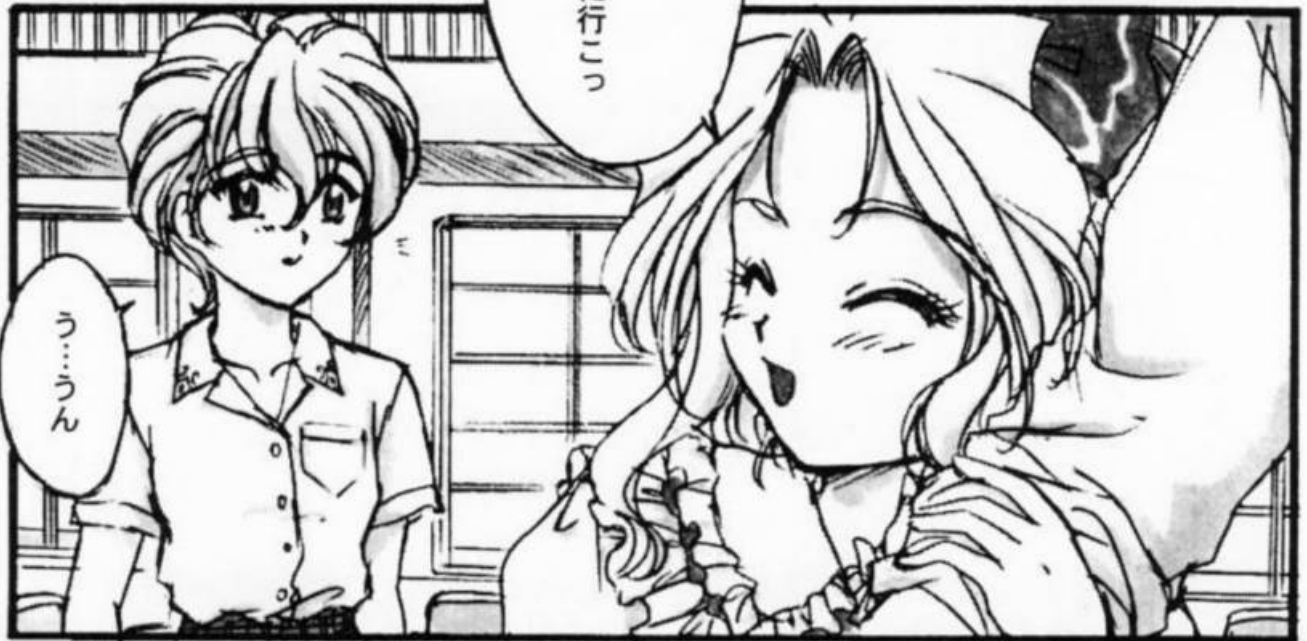
2人とも
何やってるの

おにー
ちゃん

でも、これからの一日
一人では辛い事があっても
皆と一緒になら
きっと――



レニも
いっしょに行こう



わっ

ど
ん

大神さん
元気出して！

まいひめ

〜華恋〜

壺

いちごいちえ
一期一会

終



大丈夫
ですよ

ああ



EPILOGUE

関係者以外立入禁止

ぐるりと張りめぐらされたロープに物々しい紙がついていた。多くの軍人が黒鬼会の機体の残骸を回収していた。軍人たちとは別に動いていた白服の男は軍人たちの気付かない一角に何か動く気配を認めると、その残骸の中から一人の黒髪の女を助け出した。

「まだ脈はあるな。しっかりしろ、大丈夫か。」

「う…、ここは？」

「ひどいケガだ、さあ肩につかまれ。」

「私を助けたって…、もう私には何も無いのに…。」





女の口から苦しげな声がもれた。

「そうかも知れないな。しかし、禍福はあざなえる縄の如し、
と言っている事と悪い事は表裏一体なんだ。あんたは全部失って
しまったのかも知れないが、それがかえってあんた自身の幸運な
んじゃないか。」

「…。」

「もう過去は死んだんだ。どうだい、その体を治してうちの月
組であの華劇団を影から助けちゃくれないか。そうなればあの隊
長だって随分助かる筈さ。」

「…。」

「今日をあんたの新しい誕生日にしないか。」

「…。」

女は小さく頷いた。



陽射しが強くなってきた。白服の男は黒髪の女をしっかりと抱え、涼しげな木立ちの中に消えていった。女は誰かの名をつぶやいたようだったが、風がかすかに消して行った。



新しい一日が始まる。



異形の者は
抱けないって
いうのかい？

ほらあんなだつて
好きなんだろ！

ここからしばらくは、風雅の駄文ならぬ駄フリートーク（笑）におつきあい下さいね。イラストとはほとんど関係ない文が続きますので、ご了承下さいませ。

今作は、もうお読みになった方にはいままさら水狐とサキが主役？と言われそうな時期が少々古いストーリーです。

実はストーリーはずいぶん前（サクラ2がサターンで出ていた頃です）に考えてあったのです。でも忙しくて、ずっとそのままメモの状態で止まっています。

メモは時々思い出した時に手直しして、内容を変えること数度。さっさと描ければよかったのですが、現在までかかってしまいました。

土蜘蛛に捕まった大神。
歪んだ愛情が無抵抗な雄に
向けられる。

舌を入れないと
—殺すよ



行儀の悪いところ
あの女たちに見せたら
どうなるんだろうねえ



や…やめて
お父さま…

さくらよ
子供だと思っていたら
躰は一人前の女だな

恐怖か…もしや快楽か
濡れておるわ



我が子をはらみ
魔に従うのだ

いせーっ

最初を考えていた内容では、ラストシーンのサキ君と加山の話がないまま終わってました。あと、当初絵の練習のため戦闘シーンまで頑張って描いてみよう、と思っていました。

このままでは1000pを越えて、さらにHシーンが少なすぎる(笑)ので、半分小説、半分マンガという作りになった次第です。読みにくかったですいません。でも面白い実験ができました。

父と判った鬼王に
蹂躪されるさくら。
汚される破邪の血統。



あ…

ぬる

体が…まだ
うずくん

レニ

いいよ
今までだって1人で
耐えられたんだ

ん

あの時のキズが
まだ残ってるですね

体の力を
抜いて

ちなみにこのトークのページのイラストは全て初期からのアイデアから消えたストーリーの部分を集めて描いたモノです。もしこれが入っていたらどんなストーリーになったか想像してみてね☆
とにかく大人の色気のサキ&水狐を描きたくて、煩惱のおもむくまま今回の話を考えてみました。
まあサキと水狐だけだとサクラ大戦じゃないので(笑) さくらとレニとかえでの3人を入れましたが…。

今回はシリアスもどきでしたが、今回の「まいひめく華恋く式」では明るくHな(笑)話にする予定です。

あと、「サクラ3」次第では新キャラも入れようかなあ〜と考えています。まだやってないので、何ともいえませんが。

入稿が終わったのでゲームボーイ版は早速これからやってみます。これもまだ描くかはわかりませんが。

今回は、文章部分を日吉氏にご協力いただきましたまして、氏の語彙の深さに助けられました。アリガトウゴザイマス。

水狐に弄ばれたレニ。

ふとした時に、その記憶が
身を蝕む。

織姫はただ火照りを和らげる
事しかできない。



「サクラ2」の本編では、サブキャラの事はあまりにもあっさり(笑)としていたので、かえどとあやめの事とか色々アイディアを出せましたが、今後オフィシャルと違っていたらすいません、と先にあやまってしまいますね。

「サクラ大戦3」は、まだこの時点では出ていないのですが、まだまだ「サクラ2」で描きたいモノがあるので、早くやりたいような待って欲しいような、そんなフクザツな気分です。

野々村つほみのネタもあるので(笑)いつかは女性キャラクターを全員網羅、と言ってみたりして。



大神はん…

うちは
死に行かせるために
光武を整備
してるんやないで！

トークをお読みの皆様には是非知っていただきたいことがあります。
TSKの同人誌「GG2000」の海賊版が出ているとの情報がありました。
こちらに何の話もなく、いろんなサークルの同人誌を勝手にまとめて出しているのが海賊版です。

自分たちで描かないくせに、こちらで出した本から作るから汚い印刷で出るのはとても腹がたちます！

この本を作るのにどれだけ苦労して、どれだけ時間と愛情をかけたかと思ってるのか。海賊版を見かけるたびにビリビリに引きちぎりたくくなります。

こんな事をされると、創作する気さえなくなってしまうので、皆様、どうか海賊版を買わないで下さい。

TSKではコミケ会場での直販・通販・同人誌取扱店での取扱を行っておりますので、インフォメーションページを参照して入手される事をお勧めします。

海賊版との見分け方は、TSKの本は背表紙にTSKと書いてありますし、他のサークル様とまとめて出しません。皆様、汚い海賊版などお手にしないようご注意くださいね。

格納庫での紅蘭と大神。
死を決意した大神の出撃前に紅蘭は想いをぶつける。



約束やで

絶対に生きて
帰ってきてな

ハア

ハア



ん
私…だって
頑張ってるのよ
ねえ…んっ

くちゅ

くちゅ



なぜ私を
置いていったの



姉さん…

自室に籠もって姉を想うかえで。
鏡の前にいる、もう一人は誰？

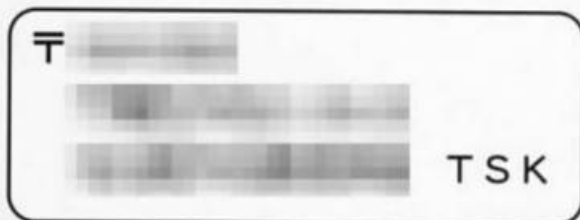
とにかくいつも初めての試みが多いので、
迷いながらも描いています。これからもど
うぞよろしくお願いします。感想などござ
いましたら、お待ちしております。では。

通信販売

お近くに取扱書店がなく同人誌が入手できない場合等に、入手の補助的な役割として通信販売を行っています。

通信販売方法は、80円切手を貼った定型サイズの返信用封筒を同封して、下記の住所までお問い合わせ下さい。通常1-2週間でインフォメーションペーパーをお送り致します。

またTSKの同人誌は全て成人向けですので、**18才未満の方のご注文は受付られません。**あらかじめ、ご了承下さい。



折り曲げ
OK!



返信用封筒です。

- ◆定型サイズを入れて下さい。
- ◆封筒に80円切手を貼って、表にご自分の住所を省略せずに耐水性のペンで書きます。

返信用封筒を同封して下さい。

- ◆表にはTSKの住所を、裏にあなたの住所・氏名を必ず書いて下さい。

ショップ

TSKでは、同人誌を無許可で複製し販売する海賊版同人誌を追放するため、全国各地の書店様にご協力をお願いして、当方発行の同人誌をお取り扱いしていただいております。

主な取り扱い書店地は、

東京・大阪・横浜・札幌・郡山・清水・金沢・広島です。

お近くにショップのない方は、上記の通信販売等をご利用下さい。

イベント参加

「TSK」というサークル名で、現在は主に

コミケット (東京)

コミックレヴォリューション (東京)

メンズコミケ (名古屋)

この3つへの参加を予定していますので、コミケ会場での直接のお求めは、そちらに足を運んでみて下さい。



GG2000 vol.1
現在好評発行中



GG vol.2

GG2000 vol.1の第2巻。風雅はモリガンを中心に、格闘ゲームキャラクターのHな話を描いて描いて、描きまくる予定です。(汗)
またもや100Pの大ボリューム!になりそう。

えう、ご期待。

風雅うつら

2000年冬 発行予定!

More Next!

「サクラ大戦 3」本。

新キャラと旧メンバーの本を計画中。

発売日は未定。

*See you ,
when the time comes!*

TSK

いいですか

どうぞ

私だって
飲みたい時もあるわ

でも あなたは
まだだめよ

ずいぶん
酔ってますね

...

分かっています

あなたは
私に似てる

でも今ならまだ
やりなおせるわ

素敵な
笑顔をつくって

無愛想な私のように
ならないでね

あなたも まだ
やりなおせますよ

ふふ
そうね

華恋志

一期一会

作画

風雅 うつら

アシスタント

日吉 幸

PROJECT・4

アドバイザー

椎村 まい

制作

TSK

どんな時でも、生まれ変われる。



きつと。

帝國茶撃団誌本
まいひめ ～華恋～
か れ ん
壺
一期一会

編集：風雅うつら
発行：TSK
発行日：2000年10月吉日
連絡先：〒

TSK

無断転載 及び 複製厳禁

未成年ノ閲覧ヲ禁ズ
青年向



TSK

presents



華恋志
夢のひめ

風雅うつら サクラ大戦 個人誌

一期一会